

「国語国文学研究」第四十九号 抜刷  
平成二十六年三月六日 発行

# 『太平広記』 訳注

— 卷四百二十一 「龍」四（上） —

太平広記読書会

# 『太平広記』 訳注

—— 卷四百二十一「龍」四（上） ——

## 太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 —— 卷四百二十一「龍」三（下）

——」（『国語国文学研究』第四十八号 二〇一三年）に続き、「太

平広記」の卷四百二十一前半三話の訳注である。「太平広記」

は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった「太平広記」

読書会の成果の一部でもある。当該書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も「太平広記」を読み進めていく予定である。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注

—— 卷四百十八「龍」一（上） ——」（『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年）及び前稿に記した通りである。作品番号は前稿の続きとする。

○27「蕭昕」

〔本文〕

唐故兵部尚書蕭昕常爲京兆尹。時京師大旱、炎鬱之氣、蒸爲疾厲。代宗命宰臣、下有司禱祀山川。凡月餘、暑氣愈盛。

時天竺僧不空三藏居於靜住寺。三藏善以持念召龍興雲雨。昕於是詣寺、謂三藏曰、「今茲驕陽累月矣。聖上懸憂、撤樂貶食。

歲凶是念、民瘼爲憂。幸吾師爲結壇場致雨也。」三藏曰、「易與稽耶。」昕曰、「迅雷甚雨、誠不能滋百穀、適足以清暑熱、而少解黔首之病也。願無辭焉。」

三藏不獲已、乃命其徒、取華木皮僅尺餘、續小龍於其上、而以爐甌香水置於前。三藏轉呪、震舌呼祝。呪者食頃、即以續龍授昕曰、「可投此於曲江中。投訖亟還、無冒風雨。」昕如言投之、旋有白龍纒尺餘、搖鬣振鱗自水出。俄而身長數丈、狀如曳素、倏忽五天。昕鞭馬疾驅、未及數十步、雲物凝晦、暴雨驟降。比至永崇里、道中之水、已若決渠矣。（出『宣室志』）

〔訓読〕

唐の故の兵部尚書蕭昕<sup>かつか</sup>常て京兆尹<sup>かつか</sup>あり。時に京師大旱にして、炎鬱の氣、蒸して疾厲を為す。代宗、宰臣に命じ、有司を下して山川を禱祀せしむ。凡そ月余、暑氣愈いよ盛んなり。

時に天竺僧不空三藏、静住寺に居る。三藏善く持念を以て竜を召し雲雨を興す。昕是に於いて寺に詣り、三藏に謂ひて曰く、「今茲驕陽、月を累ぬ。聖上懸憂し、衆を撤し食を貶す。歳凶は是念、民瘼は憂為り。幸はくは吾が師為に壇場を結びて雨を致せ」と。三藏曰く、「与し易きのみ。然れども竜を召して以て雲雨を興すは、吾風雷の震の、生植に害有るを恐る。

又た何ぞ稼穡を補はんや」と。昕曰く、「迅雷甚雨は、誠に百穀を滋す能はず、適だ以て暑熱を清むるに足るのみなるも、而るに少しく黔首の病を解くなり。願はくは辞すること無かれ」と。

三藏已むを獲ず、乃ち其の徒に命じ、華木の皮を取らしむること僅かに尺余、小竜を其の上に横ぎ、而して炬鬚香水を以て前に置く。三藏転呪し、舌を震はせて呼祝す。呪すること食頃にして、即ち横竜を以て昕に授けて曰く、「此を曲江中に投ずべし。投じ訖はりて亟かに還らば、風雨を言す無し」と。昕言の如くして之を投ずれば、旋いで白竜の纒かに尺余なる有り、鬣を揺らし鱗を振るひて水より出づ。俄かにして身の長数丈、状素を曳くが如く、倏忽として天に亘る。昕馬に鞭うちて疾駆せしむるも、未だ及ばざること数十歩にして、雲

物凝晦し、暴雨驟かに降る。水崇里に至る比、道中の水、已に渠を決するが若し。

〔語注〕

○兵部尚書 唐の中央政府は中書省・門下省・尚書省の三省を中核とし、その内、行政官庁に当たるのが尚書省である。尚書省は更に都省と吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部の六部に分かれており、兵部は国防を司る重要な役割を果たしていた。

その兵部の長官を兵部尚書と呼び、正三位の高官である。○蕭昕 六九九～七九一。字は中明。梁の鄱陽王恢の七世の孫。『新唐書』卷百五十九「蕭昕伝」によれば、大曆十二年(七七七)

に工部尚書となり、貞元三年(七八七)には礼部尚書も兼ねているが、兵部尚書や京兆尹だったという記載はない。○京兆尹 京兆とは京兆府のこと、長安を指す。その次官を尹と呼ぶ(長官に当たる牧は親王が命ぜられる名譽職)。○疾厲 「疾癘」に同じか。疾癘は流行病、疫病。○代宗 七二六～七七九。在位七六二～七七九。名は予。唐の第八代皇帝。○不空三藏 七〇五～七七四。中国四大翻訳家の一人。北インドのパラモン

系の父と、サマルカンド人の母との間で西域に生まれ、十三歳の時に叔父に連れられて長安に入る。自らインドに赴いて経論五百余部を持ち帰り、多数の密教経典を翻訳する傍ら、玄宗、肅宗、代宗三代の帝の厚い信頼を得て、中国社会に密教を定着させるのに大きな役割を果たした。『宋高僧伝』卷一に伝がある。『三藏』は経蔵・律蔵・論蔵の三つをいい、仏典の総称。

これに精通した者を「三藏法師」と呼ぶ。○靜住寺 「宋高僧傳」卷一「唐京兆大興善寺不空傳」には不空の住んだ寺が記されているが、その中に靜住寺の名は無い。或いは「淨住寺」のことか。淨住寺は安興坊十字街の西北に在った寺の名。元隋吏部尚書裴宏齊の宅。馬戴「題靜住寺欽用上人房」(全唐詩)卷五百五十六)に「寺近朝天路、多聞玉佩音。」(寺朝天路の近くに、多く玉佩の音を聞く。)とある。但し徐松「唐兩京城坊攷」によれば、淨住寺は晉昌坊の十字街の西北。晉昌坊は大慈恩寺があつたことで知られる。しかし、曲江池から晉昌坊に戻る途上永崇里は經由しないので、ここでは安興坊の方が正しいか。○持念 加持祈祷などの密教の行を行うこと。○驕陽 勢いの盛んな太陽。○民瘼 「瘵」はやまい、わずらい。○生植 生育と繁殖。○稼穡 作物を植えて收穫すること。農業。○黔首 秦代、人民の稱。後に通稱となる。○華木 樺のこと。司馬相如「上林賦」(「文選」卷八)に「沙棠櫟櫨、華楓柍櫨、留落胥邪、仁頻并閭、櫨檀木蘭、豫章女貞。」(沙棠櫟櫨、華楓柍櫨、留落胥邪、仁頻并閭、櫨檀木蘭、豫章女貞あり。)とあり、張揖注に「華、皮可以爲索。」(華、皮は以て索と爲すべし。)とある。○曲江 池の名。曲江池ともいう。長安の東南隅に位置した。漢の武帝が宜春苑をここに作り、水流が「之」の形に屈曲しているから名付けた。○永崇里 坊の名。長安城の南東部にあつた。○「宣室志」 晚唐・張誦(八三四〜八六六)が編纂した小説集。既に散佚しており、現在見るこ

とができるのは、明代の輯本(十卷・補遺一卷)のみである。この話は現行本には収められていない。

### 〔訳文〕

唐の元兵部尚書蕭昕は嘗て京兆尹であつた。當時都は大旱魃に見舞われており、蒸し暑さのあまり、疫病が流行つていた。代宗は重臣に命じて、役人を派遣して山や川で祈祷を行わせた。一月余り経つと、暑さはいよいよ盛んになった。

當時天竺僧の不空三藏は靜住寺にいた。三藏は加持祈祷によつて竜を召喚し、雲雨をおこすことを得意としていた。昕はそこで寺に行き、三藏に「今年は強い日差しが二ヶ月以上続いております。陛下は御心配になられ、歌舞音曲を廢し、食事も粗末なものに換えておられます。凶年には御懸念を、民の病には御憂慮を抱かれております。どうか御師匠様には壇を結んで雨を降らせていただきとう存じます。」と言つた。三藏は「お助けするのは簡単なことです。しかし竜を召喚して雲雨をおこすのは、風や雷の威力が作物の生育に被害を及ぼす恐れがございます。それに雨を降らせたとことで、農作物の被害を補うことなどできませんか。」と言つた。昕は「雷鳴や大雨は、確かに百穀を潤すには不十分で、暑気を払うことができるに過ぎません。しかし民の病はある程度癒されるのです。どうか御辞退なされませぬよう。」と言つた。

三藏はやむを得ず、門弟に命じて樺の皮を一尺(約三二・一cm)ほど取つてこさせ、蛇をそこに結びつけて、瓶や香炉、香

水を前に置いた。三蔵は何度も呪文を唱え、舌を震わせて大声で祈った。しばらく呪文を唱えると、結びつけた蛇を所に授けて、「これを曲江に投げこんで来て下さい。投げこんですぐにお戻りになられれば、風雨に遭わずに済むでしょう。」と言った。所が言われたとおりに投げこむと、すぐに一尺余りの白竜が翼を揺らし鱗を振るって水から出て来て、急に身の丈数丈(二丈二約三、一匹)になった。まるで白絹を引っ張ったように、たちまち天を横切っていった。所は馬に鞭かれて疾走させたが、あと数十歩(一步二、五五五匹)というところで、黒雲が立ちこめ、大雨がざっと降り出した。永崇里までたどり着いた頃には、路上の水はすでにまるで運河が決壊したかのようだった。

#### ○28 「遺尺潭」

##### 〔本文〕

崑山縣遺尺潭。本大曆中、村女爲皇太子元妃、遺玉尺、化爲龍。至今遂成潭。(出「傳載」)

##### 〔訓読〕

崑山県に遺尺潭あり。本大曆中、村女 皇太子の元妃と爲り、玉尺を遺すに、化して竜と爲る。今に至りて遂に潭と成る。

##### 〔語注〕

○崑山縣 県名。現在の上海市西部。○元妃 国君、或いは諸侯の正妻。大曆年間に皇太子であったのは後の徳宗であるが、その正妻は昭徳皇后王氏である。「新唐書」卷七十七「后妃伝」

には「徳宗昭徳皇后王氏、本仕家、失其譜系。帝爲魯王時納爲嬪、生順宗、尤見寵禮。既即位、冊號淑妃、贈其父週揚州大都督。」(徳宗の昭徳皇后王氏は、本仕家なるも、其の譜系を失ふ。帝魯王爲りし時納れて嬪と爲し、順宗を生み、尤も寵禮せらる。既に即位し、冊せられて淑妃と号し、其の父週に揚州大都督を贈る。)とあり、元々役人となり得る家柄ではあるが、系譜は明らかでないという。ただし徳宗と王氏が結ばれたのは、大曆年間以前のこと。○玉尺 玉で作った物差し。「世説新語「術解」篇に「後有一田父耕於野、得周時玉尺。便是天下正尺。苟試以校己所治鐘鼓金石絲竹、皆覺短一黍。」(後一田父有りて野に耕すに、周時の玉尺を得たり。便ち是天下の正尺なり。苟試みに以て己の治むる所の鐘鼓金石絲竹を校するに、皆短きこと一黍なるを覺ゆ。)とある。○「傳載」作者未詳。唐の武徳(六一八―六二六)から元和(八〇六―八二〇)までの間の雑事・軼事を記している。「太平広記」には三十六話ほどが収録されている。

##### 〔訳文〕

崑山県に遺尺潭がある。昔大曆年間(七六六―七七九)、村の娘が皇太子の正妻となり、玉の物差しを残していったのだが、これが変化して竜となった。今はそのまま淵となっている。

○29 劉貫詞

〔本文〕

唐洛陽劉貫詞、大曆中、求丐於蘇州。逢蔡震秀才者精彩俊爽。一相見、意頗殷勤、以兄呼貫詞。既而携羊酒來宴。酒闌曰、「兄今汎游江湖間、何爲乎。」曰、「求丐耳。」震曰、「有所抵耶、汎行那國耶。」曰、「蓬行耳。」震曰、「然則幾獲而止。」曰、「十萬。」震曰、「蓬行而望十萬、乃無翼而思飛者也。設令必得、亦廢數年。震居洛中左右、亦不貧。以他故避地、音問久絕。意有所懇、祈兄爲回。途中之費、蓬遊之望、不擲日月而得。如何。」曰、「固所願耳。」震於是遺錢十萬、授書一紙。白曰、「逆旅中遽蒙周念、既無形跡、輒露心誠。震家長蠡蟲、宅涓橋下。合眼叩橋柱、當有應者、必邀入宅。娘奉見時、必請與震少妹相見。即爲兄弟、情不合疎。書中亦令渠出拜。渠雖年幼、性頗慧聰。使渠助爲主人。百緡之贈、渠當必諾。」

貫詞遂歸、到涓橋下。一潭泓澄、何計自達。久之、以爲龍神不當我欺。試合眼叩之、忽有一人應。因視之、則失橋及潭矣。有朱門甲第、樓閣參差。有紫衣使拱立於前、而問其意。貫詞曰、「來自吳郡、郎君有書。」問者執書以入。頃而復出曰、「太夫人奉屈。」

遂入廳中、見太夫人者年四十餘。衣服皆紫、容貌可愛。貫詞拜之、太夫人答拜。且謝曰、「兒子遠遊、久絕音耗。勞君惠顧、數千里達書。渠少失意上官、其恨未減。一從遁去、三歲寂然。非君特來、愁緒猶積。」言訖命坐。貫詞曰、「郎君約爲兄弟、小

妹子即貫詞妹也。亦當相見。」夫人曰、「兒子書中亦言。渠略梳頭、即出奉見。」俄有青衣曰、「小娘子來。」年可十五六。容色絕代、辨慧過人。既拜、坐於母下。

遂命具饌、亦甚精潔。方對食、太夫人忽眼赤、直視貫詞。女急曰、「哥哥憑來、宜且禮待。況今消息、不可動搖。」因曰、「書中以兄處分、令以百緡奉贈、既難獨舉、須使輕贖。今奉一器、其價相當。可乎。」貫詞曰、「已爲兄弟、寄一書札、豈宜受其賜。」太夫人曰、「郎君貧遊、兒子備述。今副其請、不可推辭。」貫詞謝之。因命取鎮國碗來。

又進食、未幾、太夫人復瞪視眼赤、口兩角涎下。女急掩其口曰、「哥哥深誠託人、不宜如此。」乃曰、「娘年高、風疾發動、祇對不得。兄宜且出。」女若懼者。遣青衣持碗、自隨而授貫詞曰、「此鎮國碗。其國以鎮災厲。唐人得之、固無所用。得錢十萬、可貨之。其下勿鬻。某緣娘疾、須侍左右、不遂從容。」再拜而入。

貫詞持碗而行、數步回顧、碧潭危橋、宛似初到。視手中器、乃一黃色銅碗也。其價只三五鐲耳。大以爲龍妹之妄也。執贖於市、有酬七百八百者、亦酬五百者。念龍神貴信、不當欺人、日持行于市。及歲餘、西市店忽有胡客來。視之大喜、問其價。貫詞曰、「二百緡。」客曰、「物宜所直。何止二百緡。且非中國之寶、有之何益。百緡可乎。」貫詞以初約只爾、不復廣求、遂許之交受。

客曰、「此乃鎮國碗也。在其國、大禮人患厄。此碗失

來、其國大荒、兵戈亂起。吾聞爲龍子所竊、已近四年。其君方以國中半年之賦召贖。君何以致之。」貫詞具告其實。客曰、「爾實守龍上訴、當追尋次。此靈所以避地也。陰冥吏嚴、不得陳首、藉君爲由送之耳。殷勤見妹者、非固親也。慮老龍之嘆、或欲相啖、以其妹衛君耳。此極既出、渠亦當來。亦消患之道也。五十日後、漕洛波騰、濛濛晦日。是靈歸之候也。」曰、「何以五十日然後歸。」客曰、「吾拂過嶺、方敢來復。」貫記之。及期往視、誠然矣。(出『續玄怪錄』)

〔訓讀〕

唐の洛陽の劉貫詞は、大曆中、蘇州に求丐す。蔡靈秀才なる者に逢ふに精彩俊爽なり。一たび相見て、意頗る殷勤にして、兄を以て貫詞を呼ぶ。既にして羊酒を携へ來りて宴す。酒闌にして曰く、「兄今江湖の間を汎遊するは、何為れぞ」と。曰く、「求丐するのみ」と。靈曰く、「抵る所有りや、汎く郡国を行くや」と。曰く、「蓬行するのみ」と。靈曰く、「然らば則ち幾を獲ば止むか」と。曰く、「十万なり」と。靈曰く、「蓬行して十万を望むは、乃ち翼無くして飛ばんと思ふ者なり。設し必ず得しむるも、亦た數年を廢せん。靈洛中の左右に居り、亦た貧ならず。他故を以て地を避け、音問久しく絶ゆ。意に懇ろならんとする所有り、兄に折めて爲に回らしめん。途中の費、蓬遊の望、日月を擲たずして得ん。如何」と。曰く、「固より願ふ所なるのみ」と。靈是に於いて錢十万を遣らんとし、書一紙を授く。白して曰く、「逆旅の中遽かに周念を棄り、既に

形跡無ければ、輒ち心誠を露はさん。靈の家は鱗蟲に長たり、涓橋の下に宅す。眼を合して橋柱を叩かば、当に應ずる者有りて、必ず邀へて宅に入らしむべし。娘奉見の時、必ず靈の少妹と相見えんことを請へ。即ち兄弟と為らば、情合に疎なるべからず。書中亦た渠をして出で拜せしめん。渠は年幼しと雖も、性頗る慧聰なり。渠をして助けて主人と為らしめん。百緡の贈、渠当に必ず諾すべし」と。

貫詞遂に帰り、涓橋の下に到る。一潭泓澄として、何の計もて自ら達せん。之を久しくして、以爲へらく竜神当に我を欺くべからずと。試みに眼を合して之を叩くに、忽ち一人の応ずる有り。因りて之を視れば、則ち橋及び潭を失ふ。朱門甲第有り、樓閣參差たり。紫衣の使ひ有りて前に拱立し、而して其の意を問ふ。貫詞曰く、「吳郡より來り、郎君に書有り」と。問ふ者書を執りて以て入る。頃くありて復た出でて曰く、「太夫人屈し奉る」と。

遂に庁中に入り、太夫人なる者の年四十余なるに見ゆ。衣服皆紫にして、容貌愛すべし。貫詞之に拜し、太夫人答拜す。且つ謝して曰く、「兄子遠遊し、久しく音耗を絶つ。君が惠顧を勞し、數千里より書を達す。渠少しく意を上官に失ひ、其の恨み未だ減せず。一たび遁去に従ひ、三歳寂然たり。君の特に來たるに非ずんば、愁緒猶ほ積まん」と。言ひ訖はりて坐を命ず。貫詞曰く、「郎君約して兄弟と為れば、小妹子は即ち貫詞の妹なり。亦た當に相見ゆべし」と。夫人曰く、「兄子

の書中も亦た言ふ。渠略は頭を梳らば、即ち出でて見え奉らん」と。俄かにして青衣有りて曰く、「小嬢子来たる」と。年十五六可。容色絶代にして、辨慧人に過ぐ。既に拝して、母の下に坐す。

遂に命じて候を具へしめ、亦た甚だ精潔たり。方に対ひ食するに、太夫人忽ち眼赤く、直ちに貫詞を視る。女急ぎて曰く、「哥哥憑りて来たらしむれば、宜しく且く礼もて待すべし。況んや患ひを消さしむれば、動揺せしむべからず」と。因りて曰く、「書中兄の処分を以て、百繒を以て贈り奉らしむるも、既に独り拳げ難ければ、須らく軽く齎さしむべし。今一器を奉るに、其の価相当る。可なるか」と。貫詞曰く、「已に兄弟と爲り、一書札を寄すのみなるに、豈に宜しく其の賜を受くべけんや」と。太夫人曰く、「郎君の貧遊、兒子備に述ぶ。今其の請に副へば、推辞すべからず」と。貫詞之に謝す。因りて命じて鎮国の梳を取りて来たらしむ。

又た食を進め、未だ幾ならずして、太夫人復た瞪視して眼赤く、口の両角より涎下る。女急ぎて其の口を掩ひて曰く、「哥哥深誠もて人に託せば、宜しく此の如くすべからず」と。乃ち曰く、「娘年高く、風疾発動せば、祇しみ対せんとするも得ず。兄宜しく且く出づべし」と。女懼るる者の若し。青衣を遣りて梳を持たしめ、自ら随ひて貫詞に授けて曰く、「此罽賓国の梳なり。其の国以て災厲を鎮む。唐人之を得るも、固より用ふる所無し。錢十万を得ば、之を貨るべし。其の下は

鬻ぐ勿れ。某娘の疾に縁りて、須らく左右に侍るべければ、遂に従容せず」と。再拜して入る。

貫詞梳を持ちて行き、數歩にして回顧すれば、碧潭危橋、宛も初め到りしときに似たり。手中の器を視るに、乃ち一黄色の銅梳なり。其の価只だ三五緡なるのみ。大いに以為へらく竜妹の妄なりと。執りて市に鬻ぐに、七百八百を酬ゆる者、亦た五百を酬ゆる者有り。竜神の信を貴び、当に人を欺くべからざるを念ひ、日日持ちて市に行く。歳余に及び、西市の店に忽ち胡客の来たる有り。之を視て大いに喜び、其の価を問ふ。貫詞曰く、「二百緡なり」と。客曰く、「物は宜しく直たる所あるべし。何ぞ止だに二百緡のみならん。且そも中国の宝に非ずして、之有るも何の益かあらん。百緡は可なるか」と。貫詞初め約すること只だ爾るを以て、復た広くは求めず、遂に之に許して交受す。

客曰く、「此乃ち罽賓国の鎮国の梳なり。其の国に在りては、大いに人の患厄を禳ふ。此の梳失はれて来、其の国大いに荒れ、兵戈乱起す。吾聞く、竜子の窃む所と爲り、已に四年に近しと。其の君方に國中の半年の賦を以て召贖す。君何を以て之を致すか」と。貫詞具に其の実を告ぐ。客曰く、「罽賓の守竜上訴し、追尋の次に当たる。此霞の地を避くる所以なり。陰冥の吏は駭にして、陳首するを得ず、君に藉りて由りて之を送るを爲すのみ。殷勤に妹に見えしむるは、固より親しむに非ざるなり。老竜の囑を慮り、或いは相啖らばんと欲せば、其の



妹を以て君を衛らんとするのみ。此の梳 既に出づれば、渠も亦た当に來たるべし。亦た消息の道なり。五十日の後、漕洛の波騰、濺瀾として日を晦くす。是霞の帰るの候なり」と。曰く、「何を以て五十日にして然る後に帰るか」と。客曰く、「吾携へて嶺を過ぎて、方めて敢へて來り復らんと。貫之を記す。期に及びて往き視れば、誠に然り。」

〔語注〕

○洛陽 現在の河南省洛陽市一帯。○劉賈詞 未詳。兩「唐書」には見えない。○求丐 物を乞いをする。○蘇州 現在の江蘇省蘇州市一帯。○蔡靈 未詳。兩「唐書」には見えない。○秀才 科擧黎明期には明經・進士・明法などの科目の中で筆頭科に位置づけられていたが、開元年間（七一三―七四一）までに廃止され、その後は科擧に應ずる者の通称となった。○無形跡 「形跡」は禮儀作法。「無形跡」は禮儀作法を氣にかけなくて良い親密な關係であること。張鷟「遊仙窟」に「親則不謝、謝則不親。幸願張郎、莫爲形跡。」（親なれば則ち謝せず、謝せば則ち親ならず。幸ひ願はくは張郎、形跡を爲す莫かれ。）とある。○渭橋 文字通りならば、長安の北を流れる渭水に架けられた橋。三輔黃圖卷六「橋」に「渭橋、秦始皇造。渭橋重不能勝、乃刻石作力士孟賁等像祭之、乃可動。今石在。」（渭橋は、秦始皇造る。渭橋重くして勝ふ能はず、乃ち石を刻みて力士孟賁等の像を作りて之を祭れば、乃ち動くべし。今石人在り。）とあり、注に「渭橋在長安北三里、跨渭水爲橋。」（渭

橋は長安の北三里に在り、渭水を跨ぎて橋と爲る。）とある。ただし、この話では洛陽付近に在るはずなので、未詳。○娘母親。○渠 かれ。三人称代名詞。○吳郡 現在の江蘇省蘇州市。太湖の東岸に位置する。○太夫人 官吏の母。「漢書」卷四「文帝紀」の如淳注に「列侯之妻稱夫人。列侯死、子復爲列侯、乃得稱太夫人。子不爲列侯不得稱也。」（列侯の妻を夫人と稱す。列侯死し、子復た列侯と爲らば、乃ち太夫人と稱するを得。子列侯と爲らざれば稱するを得ざるなり。）とあり、漢代には子が列侯の位を継いだ場合、その母親のことを太夫人と稱したという。○動搖 心を揺るがす。○處分 決定する。判断する。○繒 銅錢に紐を通してまとめたもの。通常一千枚を一繒とする。○副 かなう。符合する。○風疾 「瘋病」に同じ。神經が錯亂し、精神に異常を來すともいう。○尉官國 中央アジアに在った國名。南北朝時代にはカシミールを指し、隋唐代にはカーピサおよびガズニー（漕國）をこの名で呼んだという。「新唐書」卷二百二十一上「西域傳」に「尉官、隋漕國也。居葱嶺南、距京師萬二千里而贏。南距舍衛三千里。王居脩鮮城、常役屬大月氏。地暑濕、人乘象、俗治浮屠法。」（尉官は、隋の漕國なり。葱嶺の南に居り、京師より距たること萬二千里にして贏。南のかた舍衛より距たること三千里。王脩鮮城に居り、常に大月氏に役屬す。地暑濕にして、人象に乗り、俗浮屠の法を治む。）とある。また「大唐西域記」卷三「烏剌尸國」に「烏剌尸國、周二千餘里。…（中略）…從此東南、登山履險、

度鐵橋、行千餘里、至迦濕彌羅國。」(烏刺尸國は、周二千餘里。：(中略)：此より東南し、山に登り險を履み、鉄橋を度り、行くこと千餘里にして、迦濕彌羅國に至る。)とあり、「迦濕彌羅國」に注して「舊曰罽賓、訛也。北印度境。」(旧罽賓と曰ひ、訛するなり。北印度の境。)という。○三五續「三五」は数の多くないこと、「鑑」は銅鏡のこと。白行簡「三夢記」に「昨夢二人從東來、一髻而短者祝醮、獲錢二鑑焉。」(昨に夢に二人東より來たり、一の髻ありて短かき者祝醮し、錢二鑑を獲たり。)とある。蘇道明「玄怪錄 統玄怪錄」(浙江古籍出版社一九八九年)は「相當于一千錢、即一緡。」と注するが、ここでは従わない。○西市 唐代長安最大の商業市場の一つ。長安城の西にあり、二坊分の敷地を占めていた。シルクロードを通ってきた西域の商人達が集まっており、酒場や旅館、金銀宝飾店なども営業していた。○胡客 西域からやってくる旅人。西域からやって来た商人が一見ありふれた物の価値を見抜き、それを高値で買い取るという一群の話、所謂「胡人買寶譚」については、石田幹之助「西域の商胡、重価を以て寶物を求むる話——唐代支那に広布せる一種の説話に就いて——」再び胡人採寶譚に就いて「胡人採寶譚補遺」(長安の春 東洋文庫平凡社 一九六七年)、宮永一登「中国古小説の展開」第五章第三節「商胡買寶譚」(研文出版 二〇一三年)等に詳しい。○且 そもそも。發語の辭。○陳首 自首する。○殷勤見妹者、非固親也 内田道夫「中国小説研究」第六章「唐の中期以降の作

品」(評論社 一九七七年)は本話の要約を挙げ、「鄭重な竜妹と いうのはもともと兄弟ではなく」と訳されている。その場合は「殷勤に見ゆるところの妹は、固より親に非ざるなり。」と訓ずると思われるが、ここでは、先に蔡霞が「娘奉見時、必請與霞少妹相見。即爲兄弟、情不合疎。」(娘奉見の時、必ず霞の少妹と相見えんことを請へ。即ち兄弟と為らば、情合に疎なるべからず。)と言ひ、また劉貫詞も「郎君約爲兄弟、小妹子即貫詞妹也。亦當相見。」(郎君約して兄弟と為れば、小妹子は即ち貫詞の妹なり。亦た當に相見ゆべし。)と言つて、妹に会う理由として劉貫詞と蔡霞の義兄弟關係が強調されていることから、「非固親也」は「竜の妹は」もともと親族ではない。」の意ではなく、「蔡霞は劉貫詞に対して」本當に親しく思つていたからではない。」の意で解する。○嚙 少し食う。試し食いする。○漕洛 未詳。「漕」は運河。洛水に繋がる運河か。○淺瀾 水の音。○「續玄怪錄」唐の李復言(生没年未詳)の撰した伝奇集。牛僧孺の「玄怪錄」のあとを継ぐ意味で名づけられた。太和年間以降の異聞を記す。「新唐書」卷五十八「藝文志」・「直齋書錄解題」は五卷とするが、「郡齋說書志」は十卷としている。南宋には臨安の書賣の刻した四卷本が出たが、四卷本は「統幽怪錄」と題している。「太平広記」には三十一話が収録されている。この話は、中華書局点校本では卷三に「蘇州客」として収められている。

## 〔訳文〕

唐の洛陽の劉貫詞は、大曆年間（七六六―七七九）、蘇州で物乞いをしていた。秀才の蔡霞という立派な風采の男と一度会っただけで大層親しくなり、霞は貫詞を「兄上」と呼ぶようになった。ある時、霞が羊肉と酒を持って来て酒盛りとなった。真も盛りを過ぎた頃、霞が「兄上が今世間を広く渡り歩いておられるのは、どういう訳ですか。」と尋ねた。貫詞「物乞いをしてるだけだよ。」霞「目的地はあるのですか、それとも広く諸国を渡り歩いているのですか。」貫詞「当て処なく放浪しているだけだ。」霞「それならどれくらいのお金が手に入ったら旅を辞めますか。」貫詞「十万銭だな。」霞「放浪しておいて十万銭欲しいとは、翼も無いのに飛びたいと思うようなものです。もしきつと手に入れることができたとしても、数年は無駄に過ごさねばならぬでしょう。私は洛陽の辺りに家があり、貧しくありません。差し障りがあつて国を離れ、長く音信不通になつております。心からのお願ひがあるのですが、どうか兄上には私のために帰郷して頂きたいのです。お引き受けいただければ、兄上は道中の旅費も、放浪したいという望みも、月日を無駄にせずに手に入れることができます。いかがでしょうか。」貫詞「もとより願うところだ。」霞はそこで銭十万を贈ることにし、手紙を一通預けた。そして「旅先にて思いがけずも目をかけていただき、すでに礼儀作法を氣にする間柄でもありませんから、私の真心をお示ししましょう。私の家は鱗ある者

を率いており、渭橋の下に家を構えております。眼を閉じて橋脚を叩けば、必ずや応答する者があつて我が家へ迎え入れられるはずです。母に謁見する際には、必ず私の末の妹に会いたいと願ひ出して下さい。私とあなたは兄弟となったのですから、よそよそしくするわけにはいきません。手紙にも彼女に出でこさせるように書いておきましょう。彼女は年は若いといつても、大層聡明です。彼女にあなたを助けさせて宴席のしきり役となつてもらいましよう。彼女はきつと御礼に百緡（＝十万銭）をお贈りすることを承諾するはずです。」と言つた。

貫詞はそのまま洛陽に戻り、渭橋の側に行つた。その淵は澄み切つて深く、どうやつても霞の家に行けそうな気がしない。しばらくして、竜神が自分をだますはずがないと思ひ、試しに眼を閉じて橋脚を叩いてみると、突然応答する者があつた。そこで目を開いてみると、橋も潭も見えず、朱塗りの門の屋敷と、高低様々の樓閣が並んでいた。紫色の衣の使者が貫詞の前に腕を組んで立ち、貫詞の来意を尋ねた。貫詞は「呉郡より参りました。若君より手紙があります。」と答えた。尋ねた使者は手紙を持って屋敷の中に入つていった。しばらくするとまた出てきて、「奥方様が、お入り下さいとのことですよ。」と言つた。

そうして建物の中に入り、四十歳ほどの母親という人に面会した。服は全部紫で、心惹かれる容貌であつた。貫詞は彼女に拝礼し、母親も答礼した。さらに「我が子は遠く旅立ち、しばらく音信不通となつておりましたが、あなたが御足労下さつた

おかげで、數千里の彼方より手紙が届きました。あの子はいささか上官の不興を買つてしまい、その恨みはまだ消えておりません。そのため一度ここを離れてからは、三年音沙汰がありませんでした。あなたがわざわざおいで下さらなければ、憂いの氣持ちが今なお積み重なつていたことでしょう。」と礼を述べた。話し終わると貫詞に座るように言つた。貫詞は「御子息と兄弟の契りを結びましたからには、妹君は私の妹でもあります。お会いせねばなりません。」と言つた。母親は「あの子の手紙にもそのようにあります。娘は大体身だしなみを整え終わつたら、すぐに出て来てお目にかかるでしょう。」と言つた。突然青衣の下女が現れて、「お嬢様がおいでです。」と言つた。年は十五、六歳くらい、類い稀なる容貌で、人に勝る聡明さであつた。彼女は拜礼して母親の側に座つた。

そうして食事の用意をさせたが、とても清潔なものだつた。向かい合つて食べている時、母親は突然眼が赤くなり、貫詞をまつすく見た。娘は慌てて、「この方は兄上が頼りにしておいでになられたのですから、礼によつてもてなさねばなりません。ましてや『心配事を無く』していただきたいのですから、不安を感じさせてはいけません。」と言つた。そして「手紙では兄の判断によつて百繒をお贈りするようにとありますが、百繒を一人でお持ちになるのは難儀なこと、軽く持ち運べなくてはなくてはなりません。今、それと同じ値打ちの器を差し上げたいと思うのですが、いかがでしょうか。」と言つた。貫詞は「す

でに兄弟の契りを結んでいる上に、手紙を一通届けただけなのに、どうしてそのようなものをいただけるでしょうか。」と言つた。母親は「あなたが貧しい旅をしていることは、あの子が詳しくしたためております。こたびのあなたの行いはあの子の願ひにかなうものだったので、御辭退なさりませんように。」と言つた。貫詞は礼を言つた。そして母親は鎮国の椀を持つてこさせた。

また食事していると、幾らしもない内に、母親の眼がまた赤くなり、両方の口角から涎が垂れてきた。娘は慌てて母親の口を掩つて、「兄上は心からこの方にお願ひをしたのですから、そんなことはしてはいけません。」と言つた。そして何と「母は高齢で、瘋病の発作が起こると礼儀正しく接しようとしてもできないのです。兄上はお帰りになられた方がよろしいかと存じます。」と言つた。娘は怖がつているかのようであつた。娘は青衣の下女に椀を持つてこさせ、手ずから貫詞に授けて、「これは屬寶国の椀です。かの国ではこの椀によつて災いを鎮めます。唐の人がこれを手に入れても、使い道がありません。十萬錢の値がついたらお売り下さい。それより下では売つてはいけません。私は母の具合が悪く、側に居らねばならないので、ゆつくりはできません。」と言つた。そして再拜して屋敷の中に入つていった。

貫詞は椀を手にして教歩歩いて振り返つてみると、碧の潭や高い橋は最初に到着した時のままのようであつた。手にした器

を見てみると、何と黄色の銅碗であった。その値打ちはたった三銭か五銭というところだった。貫詞は竜の妹が全くのでたらめを言ったのではないかと思った。器を手にして市場に売りに行ってみると、七百銭や八百銭、或いは五百銭の値をつける者がいた。しかし貫詞は竜神は信義を貴び、人を騙すはずがないと考え、毎日器を持って市場に行った。一年ほどすると、西市の店に突然西域の旅人がやって来た。旅人はこの碗を見て大いに喜び、値段を尋ねた。貫詞が「二百緡（二十万錢）だ。」と答えると、旅人は「物には適した値段というものがある。これがどうしてたったの二百緡などということがあろうか。しかしそもそもこれは中国の宝ではなく、持つていても何の利益も無い。百緡でどうだ。」と言った。貫詞は初め竜神と約束していたのがそれだけであったので、それ以上は求めず、そのまま受け入れて碗を渡した。

旅人は「これは罽賓国の鎮国の碗だ。かの国では大いに人の災厄を払うことができる。この碗が失われて以来、罽賓国は荒れ果てて戦火が止まない。私はこの碗が竜に盗まれて既に四年近くになると聞いている。罽賓国の君主は国中の半年分の税収でこの碗を買い戻そうとしている。おまえはどうやってこれを手に入れたのか。」と言った。貫詞は詳しく事情を話した。旅人「罽賓国を守護する竜が天に訴え、丁度追っ手がかかっている。これが霞が故郷を離れた理由だ。天界の役人は厳しくて自首することはできないので、おまえにこと寄せてこれを送り返

させたのだ。懇ろに妹に会うように言ったのは、本当におまえを親しく思っていたからではない。老いた竜がおまえを食いたいと思ったり、或いは本当に食べようとしたら、妹におまえを守らせようとしただけだ。この碗が出てきたからには、奴もきつと戻ってくるだろう。これが「心配事を無くす」ということだ。五十日後、洛水に繋がる運河の波がざばつと高く上がって太陽を隠すだろう。これが霞が戻ってきた徴だ。」貫詞「どうして五十日してから帰ってくるのでしょうか。」旅人「私がこの碗を持って山脈を越えたら、そこで初めて帰ってこれるのだ。」貫詞はそのことを覚えておいた。五十日経って来てみると、確かにその通りだった。

(続)

二原稿製作者・編集担当者

○屋敷 信晴

願 雯

西田 則子

項 青

山下 宣彦

○は編集担当者、○は編集責任者

○福本 睦美

永井 真平